国税庁長官賞

「希望の火打石」

園田東中学校　三年　岩崎　透也

小学三年生の後期、私の人生は大きく変わりました。姉は私学の中高一貫の進学校を目指し、毎日机に向かって受験勉強に励んでいました。家の中には緊張感がただよい、私は幼いながらもその空気を感じ取っていました。そんな中、私にとって大きな出来事が起こります。父が癌で亡くなったのです。

父は東京に単身赴任をしていました。兵庫に暮らす私たち家族のために、毎週末のように夜行バスなどで帰ってきては、必ずどこかに遊びに連れて行ってくれました。その時間は短くても、私にとって大切な思い出です。けれども、私の目に映る父は、多忙のせいか心が沈んでいるように見えることもありました。その背中を今も忘れられずにいます。

やがて父は病に倒れ、私たちの前からいなくなってしまいました。そのときの衝撃は大きく、小学四年生から中学二年生まで、私は学校に通えないまま過ごしました。勉強からも友達からも遠ざかり、姉の机に向かう姿を横目に、取り残されていく自分を感じていました。

それでも家族の暮らしは続いていきました。母は黙って働き、姉は学びを続け、私はただ時間の流れを見つめていました。どうしてここまで生活を保ててるのか、不思議に思う気持ちもありました。その答えを知ったのは、ごく最近のことです。ある日、ニュースで「遺族年金に関する法律の一部改正」について報じられていました。そのおかげで、制度の存在を初めて知ったのです。

私は深い驚きと同時に感謝を覚えました。不登校の間も、社会の仕組みが見えない形で私たちを支えてくれていたのです。もしその制度がなければ、姉は受験を続けられず、母も働きづめになっていたかもしれません。自分が立ち止まっていた間も、社会と確かにつながっていたのだと気づいたとき、心の奥に小さな希望が灯りました。

社会は目に見えないつながりによって支えられています。税金や保険料を納めることは、自分の未来を守るだけでなく、誰かの生活を支えることにも繋がります。そして必要なときには、年金という形でその支えが自分に返ってくるのです。

父を失った悲しみや、不登校で過ごした時間は消えることはありません。しかしその経験があったからこそ、社会の仕組みのありがたさを実感できたのだと思います。

私は将来、過去の自分のように立ち止まってしまった人と出会った時に、少しでも安心して歩き出せるよう、胸を張って「大丈夫だよ」と言えるようになりたいです。そのために今ある受験という壁を乗り越えて、社会や人を支えていけるような、たくましい大人を目指そうと思っています。